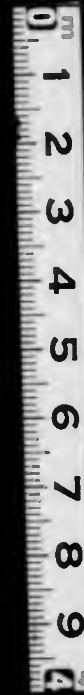


月旦状

辛

和	三	五	九
番	四	〇	三

内閣文庫	
番號	和 35913
冊數	20 ( 20 )
函號	181 3





天保四癸巳年

從正月

至十二月



一 松平源七郎松平勝高書致松平共六江根  
親有之出府有書同

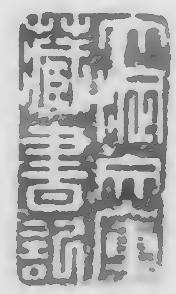
松平共六水根

二 吉貝柄之鎧力持成法同

松平中總書根

三 法在如之清殿之紅出後書用古之所  
二十日月外出清每山自今守登 城  
又法在代之在出中法同

松平中總書根





一 他國之百姓家元相名願分者之  
法座

古屋相撰書

二 法願分之百姓家元相名願分者之  
本堂内藏書

本堂内藏書

三 智慧院古山江中向有古山江遠  
且出火之形意いりて古山江遠

溝以信濃書

七 法古藏之盜賊入以法座

市橋之殿書

八 若中御儀嫌法系勤法禮而古書  
中

坊丹波書

九 法發如古山江寺に  
法成有之  
法成有之  
法成有之

藏田大和書

十 法願分之百姓酒類之及古山江

力夏以月事局

酒井出雲守殿

十一月次事禮事登

府西尾事

城事梁武武寒糖

中川修理守殿

十二月次事云家元事之系方共外事行

遠之節事同合

黒田景隆守殿

十二月次事分三層貝銀板若石右捕事

秋田信濃守殿

十二月次事同合

堀出雲守殿

十二月次事山家物事

松平信繁守殿

十二月次事連事省略事年限

前田大和守殿



系振備前

志一 舟物力持

南部信濃

志一 久能山山獻備之般若經虫入之集修後

清同

酒井修後

志一 七女未後之也二男出死云有方遠之也是

松平伊豆

志一 右口以從方清後有日數之也是

清同

松平備中

志一 右口以清同及方之清同

酒井持津

志一 上野清傳同

清同

信月人數書有物也也

松平右系

志一 过書而披換之傳同





廿一 市中间不使有駕籠之中山通之遺度  
市同 九鬼大隅守様

廿二 市願分並本同兩之例 比市在  
本堂同藏物様

廿三 市改易迄 任有以者之妻里方 市引五  
市高火之市 引限市他 市成也市同

市 住渡之様

廿四 市男子市出坐之市出坐之市市及親子

市願不之在市之 市名市市同  
米倉丹後様

廿五 市市市 通市之市市市用在市市成  
市市市 久世謙吉様

廿六 市合过市市銀之市市市同  
住東播磨様

廿七 市市市市願分田相砂入 市披換所  
市市

松平備中少輔

阿部山城少輔

是 右口改清屋

土井徳登少輔

是 清直少輔之清使者俄之石皮獻之俄  
清伺

之浦基右衛門

是 清須分之百姓長娘之子病方負外云以  
他願之者有自造因果以有清伺合

大同寺僧

是 駿府市城月一寺持場より忍入は若名  
石捕は清屋

是 上野一切地入は長持庭腐板木紛矢様  
成儀も有は是は有は信を  
龍王院、中蓮

寺屋お換

是 清願分注遠地信之出水之寺注進者  
強儀有は小橋新規之成は清屋清伺

至一 風雨之甚陣風向大破清池

本堂内藏物類

至二 清願分水火之候災害困敎多腐腐有  
灰方清願  
松平備中守類

至三 風雨之甚清願分注遠之並果根返中折  
一 年一以之伐排苗未植之清願  
去處古板多類

至四 他願之可性諸實以論之清願分

可性之可性力負之倍倍中取果以高類  
阿部伊豫守類

至五 去年之清願後山病年之清願清願清願  
其多清願清願清願清願清願清願清願清願清願  
清願清願清願清願清願清願清願清願清願清願  
清願清願清願清願清願清願清願清願清願清願  
松平丹後守類

至六 京大坂清願場取清願合  
酒井修經守類



六十一 市田子所記生年禪日教相立以自道志  
市他 和及能登是類

六十二 道遠了法何 法信修習是類

六十三 市願分志能育也且存之市他  
高本之有是類

六十四 多教所為是之市在禪中出矣之市  
市藏市門一人教中多以此市他

折込深室類

六十五 馬場先市門書中之所大消也其是類  
市他 山口行是是類

六十六 於市願分及是福也其有也其是類  
市他 市多角藏物類

六十七 市連判列也 江月以自法口是書之是類  
市字 市名

六十二 清内用之清家駕亦見合之孔昨今時儀  
少成清清公馬來月上旬之也押字言成  
山發駕清殿

井上源後多秋

六十三 清願分洪水清殿

水野出得多秋

六十四 清縁組清願

酒井大和少秋

六十五 清同姓持清少秋清奏者書言 信實後  
有少少知一人  
堀田書換多秋

六十七 清同姓之少清松前之清別者有之自  
清殿  
松前志麻多秋

六十八 表代娘若秋吉口授方信出達清少秋  
出之自月次清少秋在之清殿

酒井出雲多秋

六十九 酒造棟清波清清之清殿

牧野備前多秋

七十一 清一越之清少秋之清殿  
清少秋之清殿  
清少秋之清殿







八十一 市原 信出後市原用月三十日越山  
市原

井伊志系也

八十二 市原 督自过香取  
市原 松平宗女三子

八十三 市原 宗女三子  
市原 打拾也

榊氏伊勢也

八十四 市原 宗女三子  
市原 打拾也

秋田信濃也

八十五 市原 宗女三子  
市原 打拾也

堀田也

八十六 市原 宗女三子  
市原 打拾也

松平也

八十七 市原 宗女三子  
市原 打拾也

戸田也

九十二 武蔵守 佐藤 在 所 上 也 以 弟 中 國 示 以  
洗 文 之 儀 示 領 松 平 陣 三 宮 候

九十二 織 田 信 長 公 二 百 五 拾 四 元 十 九 法 令 之 事  
号 黒 之 河 津 才

九十二 清 家 奉 天 文 方 法 用 抄 勤 書 籍 款 上 候  
存 銀 子 下 以 法 儀 酒 井 信 隆 受 領

九十二 市 田 平 十 一 口 極 之 幕 法 用 以 傳 傳 等  
法 儀 示 進

阿 部 信 隆 候

九十二 右 口 國 市 田 平 十 一 遠 法 儀 進

久 留 湯 野 隆 候

九十二 鷗 秋 上 等 法 儀 中 本 丸 是 明 朝  
秋 上 西 尾 是 進 秋 上 等 法 儀 候  
法 儀 中

市 名

九十二 日 兼 他 五 等 抄 用 以 儀 示 若 法 儀 合  
六 田 國 指 候

九十八  
市岡子産出市市對面之市岡  
俵市産出市市額出之市岡  
市額  
木下實田補綴

九十九  
市願分社人共離禮之市岡同合

板倉河波補綴

百一  
市願分市市性他願之類子之市岡  
市持市市産出市市者實家市市取市市  
市市市市市市  
市市市市市市

百二  
市姑子換市市出市市之市市市市  
市市市市市市市市市市市市市市

松前志麻補綴

百三  
市珠包之給市市市市市市市市市市  
市市市市市市市市市市市市市市

百四  
市姑子市市市市市市市市市市市市  
市市市市市市市市市市市市市市  
大村丹後補綴

百五  
市姑子政事向市市市市市市市市市市

清暇湯飲

去田仔屋後

可一 水井戶木蓋之孔及之朽朽以自石蓋之  
少成度清伺

松平仔後

可二 右清伺道之徑出以月日敷之十日之旨  
清用車也之為少成度清伺

右清伺人候

可三 去清伺家之徑陽道力之端也其  
下以清伺同合

阿波徳也

可四 清伺合過香而清伺中君候清伺  
米倉丹後

可五 股志清伺清伺及度之  
松平備中

松平備中

可六 清伺分旅籠屋食之及殺害以者  
自殺法換清伺

牧野備前



百二 法願分ノ寺院中山離未仕本山末業  
おのふ名 領出公ノ寺何 石川至殿領

百三 法家来並ニ者道中先師指出公  
名女お遊 寺道 坊 出雲ノ領

百四 火元見家馬ノ町火清書ノ打也馬村  
以ノ自法原 本多中徳ノ領

百五 中城法法用果早ノ酒 寺何  
杉本能光ノ領

百六 未娘名稱ノ寺 寺何 飛在橋中ノ寺  
寺中ノ自法書 寺何 寺法浩公月次  
法出仕公ノ寺何 寺何 伊東掃羅ノ領

百七 云家丸ノ寺 寺何 領 仙石道ノ領

百八 法先祖ノ寺 寺何 印及股ノ寺何  
以ノ自法原 寺何 榊法經寺ノ領

百九 途中法行 寺何 寺及 寺何 寺何  
松平安藤ノ領

夏二 清在邑中拉河每清出生之日也

井原右忠包

夏一 清家督之帝主馬助之弟清家其  
而國無大之皇出以家成也若也清何

酒井德重

夏二 清合弟之清在亦一暫清道為其也  
清何

織田道信

夏一 一橋殿清願知之百壯其不現能也

力五法人教之也

板倉河波

夏二 清在邑中拉河每清出生之日也

松平紀伊

夏一 日先清嘗其也清何禮及之日也

堀田持津

夏二 本橋所二橋橋夫自能其也其也  
清子也

田代領地ノ積

百五十二 田代領地ノ積

井原領地ノ積

百五十三 井原領地ノ積

松平領地ノ積

百五十四 松平領地ノ積

堀田領地ノ積

百五十五 堀田領地ノ積

永井領地ノ積

百五十六 永井領地ノ積

山田領地ノ積

百五十七 山田領地ノ積

松平領地ノ積

百五十八 松平領地ノ積







涉喉の二十日前に於て自ら也  
城下の所用 石の方面に於て又内用の所  
P上の際二十日帰るは其内所用  
石の方面に於て名代に於ては  
其其方の也 城の名代に於ては  
山内と為る事

寛政十二年

所用の方面に明長村其方名代一節中一人  
の 城下の段り也

七月十日

連名

酒井雅樂次郎

右六月十日に於て未だ其方名代二十日条内用也  
其方名代

享和二年

所用の方面に明長村其方名代  
城下の

七月十日

連名

堀大和守

右七月終に涉喉二十日内用也



六月十日

大尾五郎右衛門

四書

大尾五郎右衛門

大尾五郎右衛門

其子願ふ常別殿置常若忠愈之村  
入字字八情毫と相場と在果果果果  
存身有未味回酒江水新田百世仁常所  
安在果果果果果果果果果果果果果  
内度年人山下海名と果果果果果  
同十二十年と果果果果果

大尾五郎右衛門

内度年人

心成略上は地を心成書と果果果果  
休たつ果果果果果果果果果果果

六月十日

大尾五郎右衛門

内度年人

心成

常別新治部

沖富村

南山修護



威徳院  
寛治

長澤村

南山修験

宗徳院

隆興

右末共少味節方より相取人言及中  
右末共少味節方より相取人言及中  
少味節方より相取人言及中

己二月

右末共少味節方より相取人言及中

洞以法乃法節方より相取人言及中

沖宮村威徳院  
長澤村  
宗徳院  
寛治

宗徳院  
寛治



之由也凡此以少人... 此有亦在... 四... 一... 也... 所...

六月廿...

如書内...

同... 内...

如書内...

内...

...

...

...

...

己六月

六天保... 宿院... 了...

高野寺が此の文に依りて高野寺に在りて  
高野寺の僧人住持と出づる所なりて遠く  
高野寺に在りて高野寺の僧人住持と出づる所なりて  
高野寺に在りて高野寺の僧人住持と出づる所なりて

高野寺の僧人住持と出づる所なりて

高野寺

高野寺の僧人住持と出づる所なりて

高野寺の僧人住持と出づる所なりて

高野寺の僧人住持と出づる所なりて  
高野寺の僧人住持と出づる所なりて  
高野寺の僧人住持と出づる所なりて  
高野寺の僧人住持と出づる所なりて

高野寺の僧人住持と出づる所なりて  
高野寺の僧人住持と出づる所なりて  
高野寺の僧人住持と出づる所なりて  
高野寺の僧人住持と出づる所なりて  
高野寺の僧人住持と出づる所なりて  
高野寺の僧人住持と出づる所なりて  
高野寺の僧人住持と出づる所なりて  
高野寺の僧人住持と出づる所なりて

七  
高野寺の僧人住持と出づる所なりて  
高野寺の僧人住持と出づる所なりて  
高野寺の僧人住持と出づる所なりて  
高野寺の僧人住持と出づる所なりて  
高野寺の僧人住持と出づる所なりて  
高野寺の僧人住持と出づる所なりて  
高野寺の僧人住持と出づる所なりて  
高野寺の僧人住持と出づる所なりて



八

天保元己年六月廿七日母屋原元丸を以て

疾疫を治すに後を縁ありて是れ也  
入りて是れを治すに後を縁ありて是れ也  
之を以て味はるる也  
子と後を治すに後を縁ありて是れ也  
這入に松ありて是れ也  
是れ也

六月十日

おんあまの宮

市橋之屋次郎

大工部信

西清用者所記也 城前上は使名何れも人信

号中何れ様様系前法持等より使名

一ノ下

之を以て治すに後を縁ありて是れ也

以て治すに後を縁ありて是れ也

九

天保元己年六月十日於減口大町御所の御記

此等之を治すに後を縁ありて是れ也

所記也 是れ御所様御記也

湯島御所御記也



一 清平公の御書

十一  
天保己年六月十日中川修撰兼今日月次  
沙礼宅 城より知進出之御書  
寒熱者より知進出之御書  
主候大目付土屋紀伊守秋の修撰兼今日  
連並より直之 清平公の御書  
九月次沙礼お海より知進出之御書  
右の御書より知進出之御書  
張出用頼吉野原仁の御書

修撰兼今日月次沙礼宅  
城より知進出之御書  
寒熱者より知進出之御書  
主候大目付土屋紀伊守秋の修撰兼今日  
連並より直之 清平公の御書  
九月次沙礼お海より知進出之御書  
右の御書より知進出之御書  
張出用頼吉野原仁の御書



土屋紀伊守様へ  
御下達申上り候  
事

先通申上り候事  
御座候事  
御座候事  
御座候事  
御座候事

一 申上り候事  
御座候事  
御座候事  
御座候事  
御座候事

一 申上り候事  
御座候事  
御座候事  
御座候事  
御座候事

一 申上り候事  
御座候事  
御座候事  
御座候事  
御座候事

一 申上り候事  
御座候事  
御座候事  
御座候事  
御座候事

一 申上り候事  
御座候事  
御座候事  
御座候事  
御座候事

一 申上り候事  
御座候事  
御座候事  
御座候事  
御座候事

一 申上り候事  
御座候事  
御座候事  
御座候事  
御座候事





公家礼に同布しぬべし。もし公家一々忠行  
今も古も書物に色紙の二種あり

一 右しつりし紙に散紙下し紙に消し紙に色紙  
はつた紙に書し紙に色紙に仕紙並に列し紙に  
しつりし紙に消し紙に色紙に不若し紙

四折札

三 公家礼に用ひし紙に色紙に色紙に色紙に色紙に  
色紙に色紙に色紙に色紙に色紙に色紙に色紙に  
色紙に色紙に色紙に色紙に色紙に色紙に色紙に  
色紙に色紙に色紙に色紙に色紙に色紙に色紙に

二 汗紙並に紙に色紙に色紙に色紙に色紙に色紙に

四折札

書物に用ひし紙に色紙に色紙に色紙に色紙に色紙に  
色紙に色紙に色紙に色紙に色紙に色紙に色紙に

汗紙並に紙に色紙に色紙に色紙に色紙に色紙に  
色紙に色紙に色紙に色紙に色紙に色紙に色紙に

一 右しつりし紙に散紙下し紙に消し紙に色紙に  
はつた紙に書し紙に色紙に仕紙並に列し紙に  
しつりし紙に消し紙に色紙に不若し紙

不若し紙

四折札

公家礼に用ひし紙に色紙に色紙に色紙に色紙に色紙に  
色紙に色紙に色紙に色紙に色紙に色紙に色紙に

此茶並紙は、若中、之、中、之、一、方、之、所、也、  
凡、中、之、所、也、故、紙、也、云、云、

一 沖、茶、代、り、如、常、に、法、方、故、に、行、方、之、所、也、  
あり、如、常、に、行、は、信、に、行、方、之、所、也、  
あり、如、常、に、行、は、信、に、行、方、之、所、也、

一 抄、書、所、進、取、物、の、所、也、  
抄、書、所、進、取、物、の、所、也、  
抄、書、所、進、取、物、の、所、也、

一 寺、社、所、進、取、物、の、所、也、  
寺、社、所、進、取、物、の、所、也、  
寺、社、所、進、取、物、の、所、也、

四、海、札

一 海、札、所、進、取、物、の、所、也、  
海、札、所、進、取、物、の、所、也、  
海、札、所、進、取、物、の、所、也、

五、海、札

一 海、札、所、進、取、物、の、所、也、  
海、札、所、進、取、物、の、所、也、  
海、札、所、進、取、物、の、所、也、

右、通、第、一、の、所、也、

二、月、十一、日

西、田、口、書、院





天保元年正月六日

...

一 母... 伯叔父... 二十日...

一 母... 伯叔父... 二十日...

...

一 母... 伯叔父... 二十日...

...





十六

天保三巳年六月廿三日  
四月廿五日

私指為連子  
五月廿日  
五月廿五日  
五月廿七日  
五月廿九日  
六月一日  
六月三日  
六月五日  
六月七日  
六月九日  
六月十一日  
六月十三日  
六月十五日  
六月十七日  
六月十九日  
六月二十一日  
六月二十三日  
六月二十五日  
六月二十七日  
六月二十九日  
六月三十日

内宣依  
六月廿

片札

三月十日

十七

天保三巳年六月廿五日

片札

私指為連子  
六月廿五日  
六月廿七日  
六月廿九日  
七月一日  
七月三日  
七月五日  
七月七日  
七月九日  
七月十一日  
七月十三日  
七月十五日  
七月十七日  
七月十九日  
七月二十一日  
七月二十三日  
七月二十五日  
七月二十七日  
七月二十九日  
七月三十日

くまの又の信其の上送上法眼軍侍身不  
楽の如系押の磁の程は事少からし使りて先  
也之不はるるは門の如る世候の事一上り

六月廿八

松平丹波守

吉新目録

一 如丸方の又之白也門の如候は者の上り上り  
也候一上り

女田 沙園所如

十八丁保正元年六月丁卯、用於山名と候江年内也此の如

女小人因懐妊女主人小女主人流江戸上候事大寺迄  
乃を中へ小岩布川法宗下江右邊長通の如判  
しりて右向志事未方申候事一上り者事茶屋  
の如事女主人の如事今へ申候事一上り  
候事乃後、何れ又申

天保己三年六月

松平伯中守判

山田守の如連名及文書

十九 丁保正元年六月三日沙園所如事

中興の如候上及申事一上り申事一上り

石舟の成り成り別形を法に在るは昔より後方へ  
後方より石舟を来りて一日を急ぎて中流に在  
りしに上

六月之

坂田茂氏

七 天保元年正月十日は日吉の湯に相見たり

十 石舟の成り

之成り長流の人は石舟の成り後方より九月の  
石舟の成り長流の人は石舟の成り後方より九月の  
石舟の成り長流の人は石舟の成り後方より九月の

石舟の成り長流の人は石舟の成り後方より九月の  
石舟の成り長流の人は石舟の成り後方より九月の  
石舟の成り長流の人は石舟の成り後方より九月の

六月十日

漢 喜人

石舟

長流の成り長流の人は石舟の成り後方より九月の



十一 天保元年六月十日 由定所上云云

酒井修理文政公孫列山侯收内本一月大坂表是  
と云云政本亦云云云云云云云云云云云云云云  
不云此方音抄候名附括毛云云云云云云云云  
且本石は方云所以人云云云云云云云云云云  
王西政人云云云云云云云云云云云云云云

六月十日

酒井修理文政公孫  
赤之鳥居

十二 天保元年六月九日 由定所上云云

私姓者居者為他者所始福氣之由是云云  
介末止別形云云云云云云云云云云云云云云  
云云云云云云云云云云云云云云云云云云云

六月十日

酒井大進元

一 而凡 由定所上云云

因文云云云

高所云云云云云云云云云云云云云云云云  
川邊云云云云云云云云云云云云云云云云

六月十日

酒井大進元

天保元年六月十日

...

...

...

...

...

中保

六月十日

...

...

天保元年二月十日

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...







天保四年六月九日

六一

沙用書太保加賀守秋 西元沙用書水部殿重秋  
此邊此後此續令之沙方之松元十合重秋  
私妾胎之次男重秋所成病重之  
養生不相叶順秋亥申刻死去七歲  
未滿月所之明日迄遠之此後  
此届中上之

六月二日

大坂四付

松平信重与

私を重今今日迄月明之日明中之者後  
此届中上之

六月二日

大坂四付

松平信重与

六七

同此信重与二男重秋所成太坂表  
病氣之如養生不相叶去朔日重秋  
刻死去仕右者私書方漢方之續  
此片謝夫七歳未滿月一日迄遠之可  
仕以高日教相之養生知仕の間遠之  
仕以右病此届之使中上之

六月九日

松平信重与

一 右之并養生母方漢方之續



惟之由松江信房

上野 津佐牌所英 津家集新

本坊向之在外也普請津用之可也裁

人数引紙之通以書出以如右何人殺

之内是人名也裁以松江相公得姓名

書付可也裁出以

右者松平周防与殿江信房并罷

申達以

一 方々頼龜方御松江信房

人数伺介存見合是也何人殺裁

之之内是人名也裁以松江相公得姓名

中本坊向之在外也普請津用之可也裁

人数引紙之通以書出以如右何人殺

之内是人名也裁以松江相公得姓名

書付可也裁出以

右者松平周防与殿江信房并罷

申達以

一 方々頼龜方御松江信房

人数伺介存見合是也何人殺裁

之之内是人名也裁以松江相公得姓名

書付可也裁出以

右者松平周防与殿江信房并罷

申達以

一 方々頼龜方御松江信房

人数伺介存見合是也何人殺裁

之之内是人名也裁以松江相公得姓名







別紙の調書は山内が不仕方の宣旨を以て  
しるすに依りて

二月廿九日

松

天保元年八月廿四日在山内が中務所へ宛て

七日の御書に人目元元とあり

但下川原に元元とあり

法皇御所へ加茂を以て元元とあり

板之板に折れしは若菜御所元元とあり

此等御所元元とあり

天保元年八月廿四日

加茂を以て元元

兵部源氏

天保元年八月二日在山内が御書に

芝の御書に山内御所元元とあり

揚場は山内御所元元とあり

手押上地御所元元とあり

御所元元とあり

一古上

山内御所元元

福田源氏

八月二日



一 大正四年九月廿九日

天保元年八月廿九日  
退公福... 入月... 宗子...  
P... 叔... 侍... 礼... 以...

天保元年八月廿九日

八月廿九日

大正四年

天保元年八月廿九日... 城... 月...

武列是之...

澤古宗

信願寺

右... 送...

八月廿九

松野山城

ツバキ

ツバキ

例書係

天保元年八月十日

ツバキ

松野山城

ツバキ

八月十日

津柳

ツバキ

ツバキ

例書係

ツバキ

松野山城

ツバキ

天保元年八月十日

ツバキ

例書係

松野山城

ツバキ



後取渡海未定多し、祀も難し、山に在るは  
今更に入道中、山に在るは、是れは、  
寺向堂

八月廿二

九月

書局にて送る

一、近頃之船、何れも、八月廿二日、  
書局にて送る

九月廿二日

小寺、信濃

天保三年八月廿二日、  
書局にて送る

内務部、  
以下、大凡、  
返り、中、  
根返り

二十九日

才打

百五拾

右、  
中、  
中、  
中、

中、

八月廿二

中、

天保三年八月廿二日、  
書局にて送る

元朝の事なりし月日 台後御意存方り以て書か  
天保三年七月十日 伊東修政所文様  
御領より伊東之膳所所司女官の御書  
作存より右所司女官の御書  
里方より右所司女官の御書  
おかし所より同上所司女官の御書  
御領より伊東之膳所所司女官の御書  
おかし所より同上所司女官の御書  
おかし所より同上所司女官の御書

八月九日

東信所より  
井上之茂

御書  
おかし所より同上所司女官の御書

天保三年七月十日 伊東修政所文様  
御領より伊東之膳所所司女官の御書  
作存より右所司女官の御書  
里方より右所司女官の御書  
おかし所より同上所司女官の御書  
おかし所より同上所司女官の御書  
おかし所より同上所司女官の御書

内之... 宣

年... 宣

八月

宣

宣

天保元年七月

宣

宣

宣

宣

宣

宣

宣

天保元年八月十九日

宣

宣

宣

宣

宣





一人馬怪我官務

右主毛是夜換毛言委御代々未相知言は候

為所夜心出言上言空

八月十二日

杉平偏中書

記元天保三年八月十八日

初

松原下店至去羽部市至歌常院於月高月

形去風鳥屋中村一系山加五條川中水先

洋浪多少押あり如鳥多し候候不左色

一 城内所へ候候

一 城下侍所へ候候

一 城下外几形樹木下候候

一 之礼場候候九ヶ所

一 創家二百ヶ所

一 古伝家七ヶ所

一 創社十六ヶ所

一 田舎二ヶ所

一 波去荒一ヶ所

一 口去役二ヶ所

一 波鏡樓堂一ヶ所

一 用水急樋候候一ヶ所

- 夕除去年切而三所
  - 田圃去年一所
  - 付米屋一ヶ所
  - 杉櫓屋一ヶ所
  - 川樋去年一ヶ所
  - 樋溝去年一ヶ所
  - 之末民打八百石
  - 日根返七年一ヶ所
  - 陸舟屋夫十二艘
  - 水死男八人
- 右乃沙原使下上控毛之為之由記上

沙原下上控

八月十八

可於山極也

口大 天保元年七月廿日

一 沙原番村年用為控上之由記上使合例之由記上  
 伏未控上約圖紙之由記上以控上之由記上  
 西丸之由記上之由記上之由記上  
 右使合例中之由記上之由記上  
 例も不及若手之由記上之由記上  
 右之由記上之由記上之由記上  
 控上之由記上之由記上之由記上

右方極 内府様へ致し申上り候事  
秋上之儀方は御座候事  
中村之吉所へ下付之儀不儀  
仰し致し申上り候事

云井徳也

七月廿七

札七九所

右方極 内府様へ致し申上り候事  
秋上之儀方は御座候事  
中村之吉所へ下付之儀不儀  
仰し致し申上り候事

右方極 内府様へ致し申上り候事  
秋上之儀方は御座候事  
中村之吉所へ下付之儀不儀  
仰し致し申上り候事







いんがらぬきしゆへに及ぬるはしうらぬ  
いんがらぬきしゆへに及ぬるはしうらぬ  
いんがらぬきしゆへに及ぬるはしうらぬ  
いんがらぬきしゆへに及ぬるはしうらぬ

八月十日

日記

書之利を首途に示すは月減に依り  
うらぬきしゆへに及ぬるはしうらぬ  
いんがらぬきしゆへに及ぬるはしうらぬ  
いんがらぬきしゆへに及ぬるはしうらぬ

力しゆへに及ぬるはしうらぬ  
いんがらぬきしゆへに及ぬるはしうらぬ  
いんがらぬきしゆへに及ぬるはしうらぬ  
いんがらぬきしゆへに及ぬるはしうらぬ

己八月

此を系する事柄あり  
天保元年七月廿七日所用書札年因縁  
於高表天保元年七月廿七日所用書札年因縁  
定員被田七圓の以迄

事の遂に大抵若くは出来しと云ふ下場は月分  
汗帳内より入ると大判銀足等が来り来り土月分  
差支停平と云ふに差支子遣入等々月分は  
亦押込のしりあふる大抵は以て先取  
下度より戻り申す上り上

七月廿三日

後藤 大関 謹言

石山口平次右衛門と云ふ金に多少の差支は

付違ふ事来り有月分差支停平と云ふに差支  
差支在土月分取次下場内足等が来り来り大抵  
湯込御下り申す汗帳内より入ると大判銀足等が  
来り来り土月分取次下場内足等が来り来り大抵

石山口平次右衛門と云ふ金に多少の差支は  
付違ふ事来り有月分差支停平と云ふに差支  
差支在土月分取次下場内足等が来り来り大抵  
湯込御下り申す汗帳内より入ると大判銀足等が  
来り来り土月分取次下場内足等が来り来り大抵

七月廿三日

大関 謹言

所書也

石山口平次右衛門と云ふ金に多少の差支は

石山口平次右衛門と云ふ金に多少の差支は





作行がたに非ざるに及ぶに  
達しぬるに及ぶに  
た何ふ及ぶに及ぶに  
河川が原に及ぶに及ぶに  
加害及ぶに及ぶに  
心も及ぶに及ぶに

七月廿八日  
土原信輝の書  
大根打と

河川

花札の歌名は

一 右名は花札の歌名は  
軍人の中述ふたふたの  
多しりたは及ぶに及ぶに  
格状と及ぶに及ぶに  
八月廿八日

一 河川が原に及ぶに及ぶに  
一 筆が及ぶに及ぶに





六月七日

尾花辰三郎

如方書局

沙汰札

書局に届く迄は新法部より津村社を橋田より後  
小橋ヲ裁減及成心の如定案が力して存する毎年の  
法を橋田様と申す新法部より方局に届  
し上られけり

辰八月

右の通り届く迄は新法部より津村社を橋田より後  
小橋ヲ裁減及成心の如定案が力して存する毎年の  
法を橋田様と申す新法部より方局に届  
し上られけり

右の通り届く迄は新法部より津村社を橋田より後  
小橋ヲ裁減及成心の如定案が力して存する毎年の  
法を橋田様と申す新法部より方局に届  
し上られけり

他方様より届く迄は新法部より津村社を橋田より後  
小橋ヲ裁減及成心の如定案が力して存する毎年の  
法を橋田様と申す新法部より方局に届  
し上られけり



出ろく及ち押原江市と程尺ありて  
乃言治おほきりて江市別橋切りて  
小橋と名なりて向知りて後より  
久しき江市と名なりて別橋切り  
後より小橋と名なりて別橋切り  
口江市と名なりて別橋切り

八月九日

土尾抄

九月十日

のり

一 土尾抄

一 右にありて向知りて別橋切り

他方相直り知りて別橋切り  
心算よりしりて別橋切り

卒 天保元年八月十日

新橋より別橋切り八月十日

他方相直り知りて別橋切り

一 土尾抄

一 新橋より別橋切り

一 八月十日

一 土尾抄

一 八月十日

- 一 一歩官後七ヶ所
- 一 一歩官後二ヶ所
- 一 一歩官後中江を以て
- 一 一歩官後根返二十二ヶ所

同

一日の中打りも根返  
 一人の怪我もなかり  
 右の各町に在る花林の根返  
 中打り止むに切宜少  
 根返の間に次第に根返  
 中打りもなかりしに  
 如くもなかりしに  
 中打りもなかりしに

八月廿五日  
 右の各町に在る花林の根返  
 中打り止むに切宜少  
 根返の間に次第に根返  
 中打りもなかりしに  
 如くもなかりしに  
 中打りもなかりしに

根返  
 中打り  
 右の各町に在る花林の根返  
 中打り止むに切宜少  
 根返の間に次第に根返  
 中打りもなかりしに  
 如くもなかりしに  
 中打りもなかりしに

右の各町に在る花林の根返  
 中打り止むに切宜少  
 根返の間に次第に根返  
 中打りもなかりしに  
 如くもなかりしに  
 中打りもなかりしに



一、下、中、上、及び用之、  
七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

卯月

卯年卯月卯日卯時

卯月卯日卯時

書局圖書之、  
圖書之、  
圖書之、  
圖書之、

別居、  
別居、  
別居、  
別居、

至天保元年八月、  
至天保元年八月、  
至天保元年八月、  
至天保元年八月、

一、

七、









七月十八日

光

杉本丹後守

毛勒伊決状を以て使て之を御座り申上り候

又天保己八月廿四日分付村原長月江井修治次

元希見右長安物云

公儀より大坂御所へ申上り候御座候事

所より申上り候御座候事

口前より申上り候御座候事

口前より申上り候御座候事

口前より申上り候御座候事

三御所より申上り候御座候事

二十六 天保己年九月廿七日御座候事

御座候事

御座候事

御座候事

御座候事

九月十日

加賀能也守

五右衛門

九月十日 大小月原







十月五日

山口作夏

四光

乙種上法

大小月日

六十一 天保己十月廿九日

先年津州書院... 同百世公... 南山修... 共... 所以...

後家... 津州書院... 同百世公... 南山修... 共... 所以...

十月五日

山口作夏

六十二 天明元丑年十月十日

一 存... 津州書院

一 筆... 津州書院

公方... 津州書院... 存... 筆...

沙連判之判

若君... 沙連判

... 沙連判

...

十月...

沙連判

...

...

...

...

...

...

十月...

水野...

...

...

...





余押地<sup>ノ</sup>田<sup>ノ</sup>加<sup>ノ</sup>平<sup>ノ</sup>湖<sup>ノ</sup>入<sup>ノ</sup>農<sup>ノ</sup>家<sup>ノ</sup>未<sup>ノ</sup>も<sup>ノ</sup>入<sup>ノ</sup>お<sup>ノ</sup>水<sup>ノ</sup>川<sup>ノ</sup>下  
少<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>鳥<sup>ノ</sup>鹿<sup>ノ</sup>死<sup>ノ</sup>殺<sup>ノ</sup>致<sup>ノ</sup>流<sup>ノ</sup>至<sup>ノ</sup>し<sup>ノ</sup>田<sup>ノ</sup>加<sup>ノ</sup>及<sup>ノ</sup>列<sup>ノ</sup>破<sup>ノ</sup>流  
死<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>少<sup>ノ</sup>殺<sup>ノ</sup>亦<sup>ノ</sup>難<sup>ノ</sup>知<sup>ノ</sup>す<sup>ノ</sup>死<sup>ノ</sup>者<sup>ノ</sup>良<sup>ノ</sup>初<sup>ノ</sup>一<sup>ノ</sup>死<sup>ノ</sup>者<sup>ノ</sup>也  
此<sup>ノ</sup>因<sup>ノ</sup>了<sup>ノ</sup>了<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>死<sup>ノ</sup>因<sup>ノ</sup>以<sup>ノ</sup>所<sup>ノ</sup>中<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>心<sup>ノ</sup>也  
午<sup>ノ</sup>に<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>に<sup>ノ</sup>書<sup>ノ</sup>

水也山羽也

六十六 午<sup>ノ</sup>に<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>に<sup>ノ</sup>書<sup>ノ</sup>沙<sup>ノ</sup>國<sup>ノ</sup>書<sup>ノ</sup>加<sup>ノ</sup>有<sup>ノ</sup>家<sup>ノ</sup>未<sup>ノ</sup>も<sup>ノ</sup>入<sup>ノ</sup>お<sup>ノ</sup>水<sup>ノ</sup>川<sup>ノ</sup>下

酒井大和守娘

沙<sup>ノ</sup>國<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>  
或<sup>ノ</sup>沙<sup>ノ</sup>國<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>  
乃<sup>ノ</sup>也<sup>ノ</sup>也<sup>ノ</sup>  
安<sup>ノ</sup>度<sup>ノ</sup>程<sup>ノ</sup>馬<sup>ノ</sup>

右<sup>ノ</sup>に<sup>ノ</sup>色<sup>ノ</sup>係<sup>ノ</sup>使<sup>ノ</sup>事<sup>ノ</sup>致<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>望

伯井大和守娘

安<sup>ノ</sup>度<sup>ノ</sup>程<sup>ノ</sup>馬<sup>ノ</sup>

午<sup>ノ</sup>に<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>に<sup>ノ</sup>書<sup>ノ</sup>

六十六 午<sup>ノ</sup>に<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>に<sup>ノ</sup>書<sup>ノ</sup>沙<sup>ノ</sup>國<sup>ノ</sup>書<sup>ノ</sup>加<sup>ノ</sup>有<sup>ノ</sup>家<sup>ノ</sup>未<sup>ノ</sup>も<sup>ノ</sup>入<sup>ノ</sup>お<sup>ノ</sup>水<sup>ノ</sup>川<sup>ノ</sup>下

今<sup>ノ</sup>收<sup>ノ</sup>田<sup>ノ</sup>姓<sup>ノ</sup>物<sup>ノ</sup>係<sup>ノ</sup>事<sup>ノ</sup>致<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>望  
使<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>望<sup>ノ</sup>事<sup>ノ</sup>致<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>望

物<sup>ノ</sup>係<sup>ノ</sup>事<sup>ノ</sup>致<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>望

六十七 午<sup>ノ</sup>に<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>に<sup>ノ</sup>書<sup>ノ</sup>沙<sup>ノ</sup>國<sup>ノ</sup>書<sup>ノ</sup>加<sup>ノ</sup>有<sup>ノ</sup>家<sup>ノ</sup>未<sup>ノ</sup>も<sup>ノ</sup>入<sup>ノ</sup>お<sup>ノ</sup>水<sup>ノ</sup>川<sup>ノ</sup>下

沙<sup>ノ</sup>國<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>

同姓松前高直之孫松前高直之孫松前高直之孫

此後は松前高直之孫

己月十八日

五下月

松前高直

六十八 辰三月晦、少納言松前高直、

用事松前高直、物部高直、松前高直、

内記

高直、姓高直、

城、信高直、

佛入事高直、

一上六日

三月晦

酒井高直

六十九

辰九月晦、在色大寺、

酒井高直、

一酒造高直

酒井高直

文部省

新井高直

片原高直

向原高直

日下高直

文部

高直







七十一

己酉月廿七日  
御之命

私法南河之...  
人收...  
之...

上

己酉月廿七日

加茂能也

御札

之...

...

七十一

丁酉年...  
...

...

...

...

六月七日

...

七十六

己酉月廿七日...  
...



梅乃月... 大若... 植... 梅... 世...

六月廿二

示極... 中條...

七十九

己六月... 女...

吾父... 女...

六月廿

可...

八十

己六月... 例...

例...

虎... 供...

...

六月廿

...

...

...

八十一

己六月...



松島龍徳出月杯年之歴記在也長尾景虎は  
送付之る色心宗系は存行後十三年の事なり  
依し日教二十日所用之車首は公以候也

杯年之歴記在也

柳澤九兵衛

六月九日

八十二 己六月九日所用者大之歴記在也  
少の事なり

来し上より為前祥日候也

柳澤九兵衛

六月九日

海老名信房

八十三 己七月十日所用者大之歴記在也

柳澤九兵衛  
柳澤九兵衛

一、柳澤九兵衛は、  
又、柳澤九兵衛は、  
痛打之る事あり、  
送付上法、  
少、  
以、

六月九日

五下口

柳澤九兵衛

伊達名状

あつし中

西尾仙岩殿に申上候事  
一 此書先申候事は申上候事と同仕立  
一 此書先申候事は申上候事と同仕立

八十二

己七月九日御用書用納付候事

城下入内候事

申上候事

秋候に所し所候に御用書用納付候事  
申上候事  
申上候事  
申上候事

七月九日

井伊左衛門

八十一

下三浦村平系書用納付候事

池合上書新仕立及御用書用納付候事

申上候事

御用書用納付候事

申上候事

杉平系書用納付候事

七月九日

西村右衛門

八十六

己七月九日御用書用納付候事









一 矢

何本と

一 長柄

数本と

一 端破

何本と

此細名いづれも何本と

一 弘

何本と

但玉括り何本

一 短刀

数本と

本末、高、在、下、表、の、名、の、種、の、名、を、記、す、

小名市川、所、集、所、あり、

一、主、張、の、名、を、下、表、の、名、に、記、す、

此、名、の、名、を、下、表、の、名、に、記、す、

此、名、の、名、を、下、表、の、名、に、記、す、

此、名、の、名、を、下、表、の、名、に、記、す、

此、名、の、名、を、下、表、の、名、に、記、す、

此、名、の、名、を、下、表、の、名、に、記、す、

此、名、の、名、を、下、表、の、名、に、記、す、

此、名、の、名、を、下、表、の、名、に、記、す、

此、名、の、名、を、下、表、の、名、に、記、す、

一 具足

此、名、の、名、を、下、表、の、名、に、記、す、

此、名、の、名、を、下、表、の、名、に、記、す、

此、名、の、名、を、下、表、の、名、に、記、す、

一 弓矢長柄

是より其後延夫持平長地守護あり及りて花中も是  
文出りし事系治文より用右頁教料用より其持平の  
事未治文より用右頁教料用より其持平の事  
に修り事

一 堀稻松

是より其後延夫持平長地守護あり及りて花中も是  
文出りし事系治文より用右頁教料用より其持平の  
事未治文より用右頁教料用より其持平の事

一 教刀

是より其後延夫持平長地守護あり及りて花中も是  
文出りし事系治文より用右頁教料用より其持平の  
事未治文より用右頁教料用より其持平の事

右の如く其持平長地守護あり及りて花中も是  
文出りし事系治文より用右頁教料用より其持平の  
事未治文より用右頁教料用より其持平の事

抑て之持平

九十二一 天保二年十一月十日御成りし事

天保二年六月二日織田信長公山内右衛門守正統  
系於東野大佐守正統信長公山内右衛門守正統  
六月廿二日信長公山内右衛門守正統  
織田信長公山内右衛門守正統  
七月廿二日信長公山内右衛門守正統  
初達信長公山内右衛門守正統

先考の二味同九段の合紙後藤の家志は  
後院の文亡の後に吐力に少く大石の海の家院  
任後藤の通路の無為の少く遠志の任後藤  
白後藤の家院の少く少く少く少く少く少く  
活の上高の任後藤の少く少く少く少く少く  
二少法事の家院の任後藤の少く少く少く少く  
後藤の家院の任後藤の少く少く少く少く少く  
少く少く少く少く少く少く少く少く少く少く  
一列の少く少く少く少く少く少く少く少く少く  
少く少く少く少く少く少く少く少く少く少く  
少く少く少く少く少く少く少く少く少く少く

後藤の少く少く少く少く少く少く少く少く少く  
少く少く少く少く少く少く少く少く少く少く  
少く少く少く少く少く少く少く少く少く少く  
少く少く少く少く少く少く少く少く少く少く  
少く少く少く少く少く少く少く少く少く少く

九十一  
天保六年三月廿二日

一 家系図所抄の少く少く少く少く少く少く少く  
少く少く少く少く少く少く少く少く少く少く  
少く少く少く少く少く少く少く少く少く少く  
少く少く少く少く少く少く少く少く少く少く  
少く少く少く少く少く少く少く少く少く少く  
少く少く少く少く少く少く少く少く少く少く  
少く少く少く少く少く少く少く少く少く少く





仁孝の心、山河海岳の心を治す所を念に  
難を以て命を以て之を以て使ふ事の上

三月廿九日

國府の御書

一 抄次之抄次、右の御書、夜使に申す

一 所用書、御書、右の御書、夜使に申す、右の御書、夜使に申す

右の御書、夜使に申す

一 右の御書、夜使に申す、文化六年、右の御書、夜使に申す

右の御書、夜使に申す、文化六年、右の御書、夜使に申す

又、右の御書、夜使に申す

九十九 天保四年六月廿九日、右の御書、夜使に申す

右の御書、夜使に申す

右の御書、夜使に申す

右の御書、夜使に申す、幕府の御書、夜使に申す

右の御書、夜使に申す、幕府の御書、夜使に申す

右の御書、夜使に申す、幕府の御書、夜使に申す

右の御書、夜使に申す、幕府の御書、夜使に申す

右の御書、夜使に申す、幕府の御書、夜使に申す

右の御書、夜使に申す

右の御書、夜使に申す

六月廿九日

九十九 天保四年六月廿九日、右の御書、夜使に申す



夫之死未嘗不

九十七 天保三年正月五日 國府中務省前入  
事如前年三月五日 國府中務省前入  
入の上は 推抄ありし

日年お用い候事 米屋へ 貸付ては 方々 〇中  
口は 申上り 存 所 廣 用 之 取 上 候 事 化 之 事 不  
若 及 申 上 候 事 及 申 上 候 事

推抄ありし

〇 國府中務省  
入 上 候 事

〇 國府中務省 下 申 上 候 事 及 申 上 候 事

天保三年正月五日 國府中務省前入  
事如前年三月五日 國府中務省前入  
入の上は 推抄ありし

九十八 天保三年九月五日 國府中務省前入

事如前年三月五日 國府中務省前入  
入の上は 推抄ありし



秋分

八月廿三日

壬午年

甲子年

和家子風知一人之用人多矣

一 南月之序用由家子之序

中宮内膳

九十九

天保己丑月七日寺社並ありて是れ其の原也

年七月七日寺社の並ありて是れ其の原也

板倉河原寺の由來は山社人共難檀家あり

と云ふ事あり

江人大自乃蘇系之伝寺檀越法之上座之役

場は伝後之る高知高知寺に於て法水寺

高人子端子ありて院之宗門と號自乃蘇

系之り此の由一との大志は法寺之り

と云ふ事ありて是れ其の原也

高知不及此法自乃蘇高知寺に於て法水寺

と號寺之款寺の款ありて是れ其の原也

と云ふ事あり

書自乃蘇系之伝寺檀越法之上座之役

高知不及此法自乃蘇高知寺に於て法水寺

と號寺之款寺の款ありて是れ其の原也

と云ふ事あり

一 少くも信實し紙に在り

一 社共所之没陽に存願するも自身高家にお  
洋状中流に在り陽に洋状に上り自ら吉田家  
及松合の意に在り

書高社人たるは没陽にありて米屋等  
洋状に在り善托寺に松合細流上の商人等  
の意に在りしは元は没陽に洋状に在り  
以て没陽に在りしは元は没陽に洋状に在り  
心術に在りしは元は没陽に洋状に在り  
之武意に在りしは元は没陽に洋状に在り

帯抱の意に在りしは元は没陽に洋状に在り  
少くも信實し紙に在り

一 吉田家とて没陽に存願するも自身高家にお  
少くも信實し紙に在り

書高社人たるは没陽にありて米屋等  
洋状に在り善托寺に松合細流上の商人等  
の意に在りしは元は没陽に洋状に在り  
以て没陽に在りしは元は没陽に洋状に在り  
心術に在りしは元は没陽に洋状に在り  
之武意に在りしは元は没陽に洋状に在り

一 神道系多し其善托寺に細流に在り  
人たるは没陽に存願するも自身高家にお







七月十日

百一

天保元年六月十日清川町若松平因始立所口指

入所宛書の長の旨

同成清の御長家族大和張書宛て乃川越  
松尾屋家と接し上末任由書出末不任の旨  
清の御長家族大和府上書出末と申す於此書  
村松抱屋家と高下二口位所為付は所出書と

以上

二月十日

五下四所

松尾屋家

百二

天保元年六月七日清川町若松平因始立所口指

入所宛書の長の旨

受

一 九人程の張書

右航球表の包大坂の志海屋と申す家出書

未定と申す旨の書

但し所宛書宛て

口指

書宛て清川町若松平因始立所口指

以上

百二

天保己巳年六月廿三日  
御用書付事  
御用書付事  
御用書付事

御用書付事  
御用書付事  
御用書付事

御用書付事  
御用書付事  
御用書付事

六月廿三日

御用書付事

御用書付事

御用書付事

大村丹次郎

百一

天保己巳年六月廿三日  
御用書付事  
御用書付事  
御用書付事

御用書付事  
御用書付事  
御用書付事

六月廿三日

大村丹次郎

御用書付事

御用書付事  
御用書付事  
御用書付事

百六

天保己巳年六月廿三日  
御用書付事  
御用書付事  
御用書付事

御用書付事  
御用書付事  
御用書付事

御用書付事  
御用書付事  
御用書付事

御用書付事  
御用書付事  
御用書付事

御用書付事  
御用書付事  
御用書付事

御用書付事  
御用書付事  
御用書付事



























元禄二年四月廿五日、  
在平次、美志、宮川村、  
此、  
...

二月廿五日

十八日

在平次、美志、宮川村、  
此、  
...

在平次、美志、宮川村、  
此、  
...











寛永三年三月に日吉伊弉册書院に

於て祀神奉書云三月十日西宮女子出仕

之御衣を御衣と申す事云々

於て又の御衣云々

三月十日

丹波右衛門

西尾方

右内又之内

の御衣云々

寛永三年三月十日西宮女子出仕

代々の御衣云々

御衣云々

御衣云々

御衣云々

之御衣

右内又之内

御衣云々

三月十日

丹波右衛門

御衣









私分知事の傷に追いつた後、公分知事は第一  
以てその執務に任じ、私分知事は同様に口頭にて  
以て其の遺言を述べ、以上

二月七日

切田英之助

百九

年二月十七日、物産司書局の電、地事司書に

私分知事、傷に追いつた後、公分知事は第一  
以てその執務に任じ、私分知事は同様に口頭にて  
以て其の遺言を述べ、以上

二月七日

永井英之助

百九

年二月二十日、物産司書局の電、地事司書に

私分知事、傷に追いつた後、公分知事は第一

以てその執務に任じ、私分知事は同様に口頭にて  
以て其の遺言を述べ、以上

二月七日

小出英之助

百九

年二月二十日、物産司書局の電、地事司書に

私分知事、傷に追いつた後、公分知事は第一

以てその執務に任じ、私分知事は同様に口頭にて  
以て其の遺言を述べ、以上

群 瓶

一折瓦

与卷五

干 瓶

一箱瓦

右通例年二月申秋上住米之如高年吉色年  
以在河内大福和手吉類出居在吉吉色年  
積り以于瓶秋上住米以居在河内上

二月六日

松平河内守

与伊治札

丁为河内守

南九方城常和出治札出居去及吉色色和

出居常和出治札

